トヨタ財団レポート
THE TOYOTA FOUNDATION REPORT
Jul. 1982 No.18

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒160)
TEL.(03)344-1701～3

第27回理事会開催

前年度事業報告の承認や企画委員会の発足など

6月16日(水)，東京において第27回理事会が開催され，昭和56年度の事業報告・決算報告が承認された。また国際助成の助成対象，翻訳出版促進助成の助成対象についても審議され，それぞれ2件1285万円，10件2190万円の助成が決定され，また，評議員の選任が行われた。

この他今回は企画委員会の設置について審議・承認され，林専務理事を委員長に，浅田・天城・大島の各理事が委員となって今後の財団のプログラムの展開について審議することとなった。とかく助成財団のプログラムは当初のスタート時の枠組がそのまま踏襲され新しい社会の動きを反映した流動的な対応が困難となる場合が多いようであるが，そのようにならないよう常にプログラムの検討を計ろうとするのが設置の目的である。

なお理事会に引続き，第7回の評議員会が開かれ，財団活動について報告されると共に，理事・監事の選任が行われた。

研究助成744件の申請を受理

――昭和57年度の公募を締切る――

例年4月，5月の2ヶ月にわたって行っている研究助成の公募も，本年度分については5月末日の消印をもって締切らせていただいた。

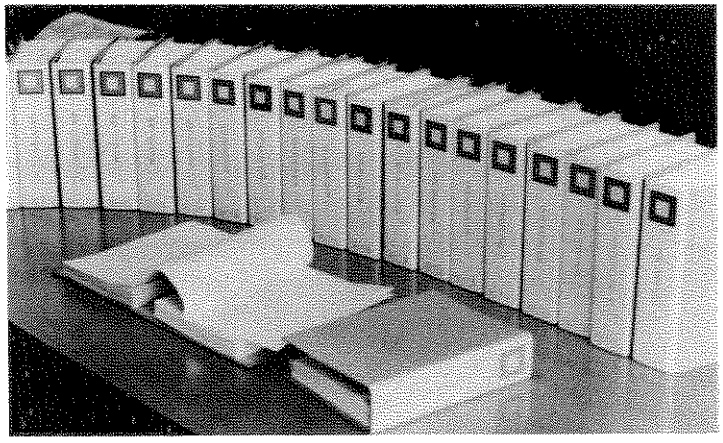
本年度は特定課題の新規公募を行わない，また本年度より三つの研究種別を設定する，など従来の公募と異なる点もあったため，それがどのように申請件数に影響を及ぼすか予想が難しかった。結果は下表の通りであり，申請総額は約27億円で助成予定額2億8000万円のほぼ10倍と例年並みにおちついた。特定課題の新規募集をしなかった分だけ全体の件数は減少したが，3つの各領域についてはそれぞれ7～10%の件数増となっている。

研究種別を設定したことの影響は代表者の年令及び所属機関に統計として表われた。すなわち，3領域とも，Ⅰ種（個人奨励），Ⅱ種（予備研究），Ⅲ種（本研究）の順に代表者平均年令が高くなる，申請者所属機関中の大学関係者の占める割合が同じ順に高くなる，の2点である。

この6月末より愈々選考が始まる。夏を経て，10月の初旬には各申請者に選考結果をお知らせできるようになろう。

本年度申請書のファイル（744件分）

この正書から各選考委員に配るためコピーを作成すると，ファイル数は7～8倍にふくれ上る。



昭和57年度研究助成応募状況

※1　件数下段の（　）内は昨年度助成件数を示す。
※2　申請額下段の（　）内は助成予定額を示す。

項目		申請状況		
		件数	申請額	申請額/件数
研究助成内訳	交通安全，生活・自然環境領域	281件 (26件)※1	11億0,724万円 (1億1,000万円)※2	394万円/件
	社会福祉領域	183件 (21件)	6億5,999万円 (6,500万円)	360
	教育・文化領域	269件 (26件)	8億7,628万円 (8,500万円)	319
	特定課題研究	11件 (15件)	5,083万円 (2,000万円)	462
研究助成合計		744件 (88件)	26億9,434万円 (2億8,000万円)	360万円/件

東南アジア便り

国際部門・プログラムオフィサー
岩本 一恵

今回の東南アジア便りでは，ダイナミックなプロジェクト展開の鍵が，「人」（プロジェクト実施者）とプロジェクト実施「時機」にかかっているということを雄弁に物語るケースをご紹介したい。

●タイ　「航空写真によるタイの環濠集落遺跡のインヴェントリー作成」

登場人物

ここにリモート・センシングを専門とする地質学者がいる。名をティワ・スパジャンヤという。ティワ氏はこの17年来，チュラロンコン大学において自分の専門分野であるリモート・センシングの研究を行うかたわら，タイ国の古代集落遺跡に関する情報を集めて来た。より正しい言い方をすれば，古代遺跡に関する情報を生み出してきた。氏は優れた学者であると同時に，戦略的思考のできる人である。

もう一人，ポンシー・ワナシンという地理学者がいて，女史はチュラロンコン大学で地理学を教えるかたわら，サイアム環境協会の副会長としても責任を果して来た。実行力のある人である。

そしてさらにもう一人，地方を歩く学者がほとんどいなかった30年前から東北タイを中心に僻遠の地に足をのばし，考古学と民族学の研究を行ってきたシーサック・ワリボタマという活動的な学者がいる。氏は，地方史を地方の人々が調査研究して行くことによって，今までの中央偏りのタイの歴史が書き替えられて行くべきだという考えの持主で，現在，シルパコン大学の大学院修士課程に設けられたコース（集落考古学，口承伝統，開発考古学）を軌道に乗せようと懸命である。

最後に登場するのは，水産学が本来の専門なのだが，それだけに専念していることを時代が許さず，チュラロンコン大学の環境研究所で活躍した後，サイアム環境協会を組織して，社会的啓蒙活動を行っているスラポン・スダラという学者である。氏の学問的視点に立った冷静な発言と人間的魅力を感じさせる説得力とは，つとに知られているところである。

以上４人の専門家は全員，大変個性的で，タフであり，厳しい発言をする一方，寛大でもあり，同時に仕事熱心である。

「写真のこの部分が遺跡なのです」ティワ氏（真中）、ポンシー氏（左）、右端は林専務理事。チュラロンコン大学で。

そもそもの始まり

ティワ氏は，17年前からリモート・センシングの研究で航空写真を使っているうちに，環濠集落の遺跡と思われる地点を写真の中に発見した。門外漢であった氏は，友人のシーサック氏の応援を求め，実際にそれが遺跡であるかどうか，現地に出かけて行って確認を行った。その後しだいに航空写真の中の遺跡を同定する方法に熟達し，時代の変化による遺跡の形態の変化も読み取れるようになった。こうしてこの17年間に約 900ヶ所の遺跡の同定が行われたが，資料はティワ氏のキャビネットにしまい込まれたままであった。

近年，道路，運河，貯水池等の建設が急激に行われ，遺跡が破壊されるケースが出て来た。どこに遺跡があるのかがわからないためである。これを憂慮したティワ氏は，地理学専門のポンシー氏と組んで，遺跡に関する情報がそれを必要とする人々の手に届けられるような形に整備しようと計画した。すなわち，遺跡の位置，名称，コード番号を記録したインヴェントリーの作成である。この３ヶ年プロジェクト計画に対して当財団は協力を行うことに決定したのである。インヴェントリーが完成す

「これはやはりクメールの遺跡ですよ」
シーサック氏（手前）。東北タイで。

れば，開発計画の担当者は遺跡を避けた形で，道路等をつくることができる。また，スコタイ王国以前の歴史が漠としてよくわかっていないという現状に対して，インヴェントリーの完成は考古学者，美術史学者，歴史学者，民族学者，言語学者等の研究に手がかりを与え，突破口づくりへと導く可能性がある。

スラポン氏(左)と林専務（右）。

反響

プロジェクトが始まってからの反響は大きかった。総理府下の全国環境委員会および文部省下の全国文化委員会から，そしてまた国有地局からも，遺跡のリストがすぐにでも欲しいという申し入れがあった。

ティワ・チームは，スラポン氏の助力を得て，テレビ，ラジオ，新聞，雑誌を通し，また，時にはセミナーにおいても，活発な啓蒙活動を遺跡保存について展開した。それに対して，予想以上の熱心な反応が地方の文化センター（多くは師範学校の中に置かれている）から寄せられ，問合せの手紙は30通にも及んだ。

また，今までこの分野のプロジェクトにはほとんど縁のなかったチュラロンコン大学も，学長直属の「古代集落研究プロジェクト」を設け，そのサブ・プロジェクトとして当プロジェクトが位置づけられることになった。

この他に，様々な分野の研究者から問い合せや訪問が相次いだ。

「人」と「時機」を得て

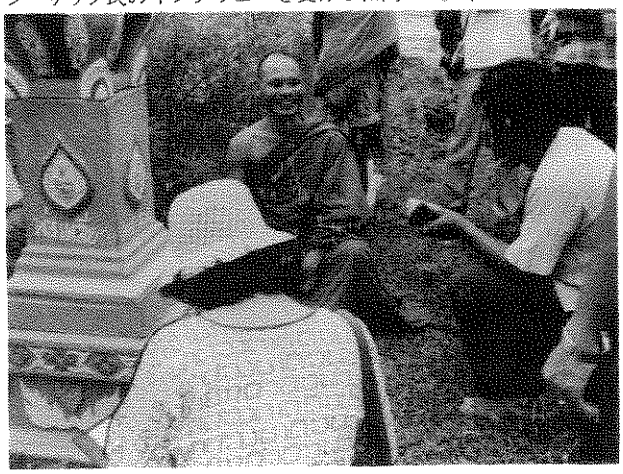
ティワ氏が自分の専門以外のことに好奇心を燃やさなければ，そもそも当プロジェクトは存在しなかった。全国をよく歩いて多くの遺跡や古くからある村を見ているシーサック氏がティワ氏の好奇心に具体性を与えなかったならば，やはりこのプロジェクトは誕生しなかったのではなかろうか。一方，この数年間スラポン氏は環境保全の重要性について社会的啓蒙活動を続けてきたが，それが無かったならば，「時機」づくりが難かしかったし，当プロジェクトの広報活動が困難であったろう。「時機」づくりをさらに効果的にしたこととして，スラポン氏とティワ氏が現在，全国環境委員会，全国文化委員会の委員であることも特記しておきたい。また，地道にプロジェクトをやり遂げるポンシー氏がいなければ，実施上の支障が出たかも知れない。この組み合せは，計画をより一層ニーズに合ったものに改善したり，外界の変化に対応する際には，無類の強さを発揮する組み合せなのである。

ティワ・チームは最近，遺跡のインヴェントリーが使用される時の，ユーザー側でのニーズを東北タイのブリラム師範学校に関して調査してみた。その結果，もう一つの「時機」が到来していることがわかった。それは，地方の教育機関に自主的，積極的な地方史探求の意欲が芽生えてきたことである。また，ユーザー調査は，遺跡リストの他に，詳細な地図と詳細な航空写真が必要であること，師範学校の講師，学生が地方史の研究に大変意欲を燃しているにもかかわらず，航空写真の見方や調査のし方がよくわかっていないこと，短期間の簡単な調査からもかなりの量の情報がフィード・バックされること，を物語っていた。

今後の見通し

これらのニーズを満たすために，そしてまた，地方の人々を対象にした訓練プログラム，及び，フィード・バック情報を受取ることができるようにするために，今後新たに，古代住居址情報センターづくりに着手することが予定されている。「人」の組合せの強さを発揮して，艱難を乗り越えていただきたいものである。

「和尚様、この近くに遺跡があるのを知っておられますか」
シーサック氏のインタヴューを受ける和尚さん。東北タイで。



活動報告

第14回研究報告会と研究交流会議

「環境における重金属とその生体影響」

当財団の助成研究報告会も14回を数え，ここ2回では東京以外における開催などの新しい試みも行ってきたが，今回は，有志研究者の発意による研究交流会議とのジョイントで，標記タイトルのもとでの3日間にわたる連続プログラムを試みた。

第1日目は，サブテーマを「生物試料による環境モニタリング」とし，財団の助成研究2件の報告と「モニタリング手法の確立と国際協力」をめぐっての討論を行った。

研究報告①では，イルカを試料としての海洋生態系のモニタリングについて愛媛大農学部立川涼氏から報告いただき，サメを試料として同様の研究を進めておられる東大農学部清水誠氏からコメントをいただいた。

研究報告②では，血液試料による全国21都道府県にまたがる生活環境のモニタリングについて東北大医学部池田正之氏から報告いただき，毛髪中の重金属測定を全国各地で行ってこられた順天堂大医学部福島一郎氏にコメントをいただいた。

後半の討論では，公衆衛生院の山縣登氏を座長として，公害研計測技術部の安部喜也氏から長期モニタリング手法としての環境試料バンクのモデル概念と諸外国の事例について，厚生省環境衛生局の藤井正美氏から，氏が環境庁時代に経験されたモニタリングに関する国際協調の難しさについて，また筑波大社会医学系の橋本道夫氏から環境モニタリングを制度として確立する上での問題点について，それぞれ話題提供をいただき，これをめぐって討論が行われた。

第1日討論（左より山縣，橋本，藤井，安部の各氏）

第2日討論：話題提供（左：二塚氏，右：原田氏）

ここでは，環境モニタリングにおいて，何をどう測るかという科学者の関心のレベルと，モニタリングネットワークをどう運営し続けるかという行政の関心のレベルとの隔たりが一つの問題点として出てきたように思う。

第2日目は，「不和火海の生物と重金属汚染」のサブテーマのもとに，7件の研究報告と「不知火海の汚染と環境科学」についての討論を行った。

研究報告①②では，汚染と生物相の変化との関わりをめぐって，動物プランクトンの分布に関し熊本大理学部の弘田礼一郎氏に，ベントス（＝底生動物）の分布に関し九大理学部の菊池泰二氏にそれぞれ報告いただいた。

研究報告③～⑦では海水や底泥の汚染をめぐって，これまでの海域汚染調査の概況を日本エヌ・ユー・エス㈱の堀田秀之氏に，海域汚染と水俣病との関連について筑波大学社会医学系の藤木素士氏に，また底泥の水銀汚染と，そこでとれる魚類に蓄積された水銀量との相関について東大工学部の西村肇氏に，さらに不知火海の底泥中の水銀分布について新潟大工学部の鈴木哲氏に，及びその水銀の移動について長崎大水産学部の宮原昭二郎氏にそれぞれ報告いただいた。

後半の討論では，東大教養学部の最首悟氏，公衆衛生院の田口正氏を座長として，熊大の医学研究班として水俣病の発生初期から研究に従事してこられた原田正純氏と二塚信氏に，それぞれ，過去25年の教訓と今後の課題について話題提供をいただき，この日報告されたすべての研究をふまえての討論が行われた。

この中で指摘された重要な点は，水俣の悲劇は決して

第3日討論（左より大井，鈴木，山縣の各氏）

終結したわけではないということ。むしろ，今後このような悲劇をくり返さないために何をなすべきかという観点に立って考えるならば，研究はようやく始まったばかりだということであろう。

第3日目は「金属の生体影響——最近の動向と今後の展望」をサブテーマとし，講演及び研究報告4件，さらに3日間の内容を総括して「今後の課題と展望」と題する総合討論を行った。

講演では，群馬大医学部の和田攻氏に，初日・二日でとり上げられた重金属のとらえ方，すなわち環境毒物としてのアプローチとは別の視点として，生体における代謝学的アプローチ，及び必須金属といった栄養学的アプローチからの最近の研究動向を語っていただいた。

次いで研究報告①~④では金属と生体をめぐる最近の研究として，東大医学部の松原純子氏には，放射線曝露に対する亜鉛の防護効果を中心とした多重環境要因の複合効果について，北里大永沼章氏には，SeによるHgの毒性軽減作用などを含むSe－Hg相互作用について，旭川医大医学部の土井陸雄氏には，メチル水銀の生体内動態における種差・系統差・個体差の究明をめざした動物実験について，新潟大理学部の小俣三郎氏には，メチル水銀中毒の蛋白合成系におよぼす影響を追究した動物実験について，それぞれ報告いただいた。

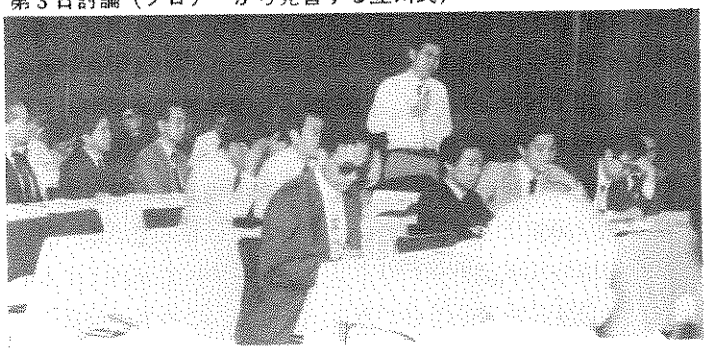
総合討論では，公衆衛生院山縣登氏に環境モニタリング・環境汚染防止の立場から，東大医学部鈴木継美氏には金属の生体影響研究の立場からそれぞれ基調講演をいただき，東大医学部大井玄座長のもとに，3日間の報告・討論をふまえての活発な議論が行われた。

以下討論の中でいくつか考えさせられた問題点を上げてみる。ひとつに，水俣の例でみられたような研究と現場との隔たりを今後の環境研究の中ではどうやって埋めていったらよいのかという問題提起があった。また，地球規模で国際協調のもとに環境管理を考える場合どこまで発展途上国の参加を望みうるかという問題も大きい。また様々な環境因子について，集団的な確率統計のレベルでリスクを論じる場面と，個人にとってはall or noneの問題であるのだからそのレベルでリスクを論じる場面とは分けて考えるべきだとの指摘もあった。関連して，データの背後に一人一人の人間がいることを常に念頭におくべきだとの意見も出された。環境許容量を問題にする場合，平均値で議論されがちであったことを思うとこれは重要な考え方であろう。また環境研究の方法について，個々のディシプリンをきわめた研究者の学際研究という方向にのみ期待しうるのかどうか，研究者育成の段階からもっと別の道が考えられるのではないかとの意見もあった。

今回の報告会の内容は高度に専門的で，われわれ素人にはきわめて難解なことがらが多かった。しかし，問題にされている事柄自体は，まさにわれわれの生命にかかわる環境の問題なのである。その意味で，今後はこの種の会合を素人に向けての情報提供という視点から展開していくことも大変重要なのではないだろうか。そのことは，それぞれの専門研究者にとっても他分野の研究状況をより深く理解する上で有益なはずであり，ひいては，日常言語のレベルを共通土俵としたより緊密な学際研究の展開にもつながるのではなかろうか。

なお，この3日間の報告・討論の記録は，来春，恒星社厚生閣より出版される予定である。（久須美記）

第3日討論（フロアーから発言する立川氏）



―昭和56年度　研究助成―

中間研究報告会を終えて

4月下旬から5月中旬にかけ，東京の国際文化会館で下記の通り助成研究についての中間報告会がもたれた。

- 社会福祉領域　4月24(土)，25(日)
- 特定課題研究　4月30(金)，5月1(土)
- 教育・文化領域　5月8(土)，9(日)
- 交通・環境領域　5月15(土)，16(日)

今回は，昭和56年度の助成研究，計88件のうち，2件を除く全てについての報告が行われたわけであるが，最も気候の良い時期の週末を潰して(?)の連続8日間にわたる報告に耳を傾けるのは，やはり相当の忍耐力を要するものであった。それでも，1件 20分という限られた時間に対し，周到な準備のもと熱意ある報告をしていただいた関係者の方々には実に頭の下る思いであった。

報告全体を通じて受けた印象はと言えば，各チームとも大変意欲的にユニークな研究に取り組んでおられ，今後の発展が楽しみであるという一言に尽きるのであるが，いくつか気になる点もあったので私見ではあるが触れさせていただきたい。実験科学的なアプローチを主体とする自然科学系の研究や文化人類学的な研究と比較して，社会科学系のそれには，何か迫力の欠けるものが見られた。これは，一つには方法論の問題によるものと考えられる。多くは，アンケート調査の手法を用いているわけであるが，充分な検討がなされないまま実施されたこの種の調査は，事の本質を肝心な調査の設計自体の過程で見落しているのではないかという気がしてならない。とりわけ，予備的研究の中にその様なものが幾つか見受けられたが，これは，“予備”ということを何か安易に解釈している結果ではないかとも思われた。もっとも，この点については，私共にも反省すべき所があり，予備的研究を継続研究を含めた本格的な研究と同列で報告いただいたこと自体に若干の無理があったとも考えているので，これは来年度の課題としたい。

次に，研究それ自体はしっかりしたものであっても，「それでどうなるのか？」と問われた場合，首をかしげたくなるものもあるということである。すなわち，研究助成の主旨の一つである“研究の社会性”との関連である。私共の言う“社会性のある研究”とは，「専門研究者と生活現場との間を結ぶもの」ともいえるかと思うが，生活現場における問題の所在がいつの間にか捨象されて研究のための研究が一人歩きをしているのではないかと思われるものもあったように感じたのである。　(渡辺記)

―第2回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”―

研究奨励賞候補のインタヴュー始まる

今年2月末に決定した第2回研究コンクールの研究奨励賞候補チーム（20件）に対するインタヴューが，5月末から開始された。

これは，“身近な環境をみつめよう”というコンクールの趣旨から，財団側も提出された研究計画書のみで対象チームの研究を把握しようとするのではなく，実際に行われている現場にも足を運び，研究者との対話を通じて研究全体を理解しようと意図して行われるものである。

インタヴューには，財団側から選考委員の先生方と事務局の者とで現地をお伺いし，現在の進捗状況や今後の方向をお聞かせいただく他，研究現場あるいは研究対象地域の見学も行わせていただくことになっている。研究奨励賞候補20チームのインタヴューすべてが終了するのは，8月中旬の予定である。そして，これらの結果や，8月下旬に東京で行う予定の中間報告会での発表，及び最終報告書の審査を通して，9月下旬には「研究奨励賞」受賞チームが決定される。

さまざまな立場の市民と専門研究者とが手を取り合った形での，各々の生活現場からの発想にもとづくユニークな活動が展開されていることを期待したい。

最後に，既にインタヴューを実施させていただいたチームの皆さん，お忙しい中，貴重な時間をさいていただき有難うございました。　(渡辺記)

帯広の市民植樹祭の現場を視察する選考委員

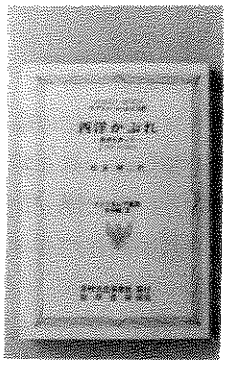
助成刊行物紹介①（「隣人をよく知ろう」プログラム）

「西洋かぶれ－教育を誤って－」

アブドゥール・ムイス著，松浦健二訳
井村文化事業社刊（インドネシア叢書文学編1）A5 296頁，1,700円

本書は，1928年出版以来10数版を重ね，インドネシア近代文学の確立を告げた名著と言われている。著者のアブドゥル・ムイスは，インドネシアの最初の民族主義大衆運動イスラム同盟の指導者として名高く，後年思想者の面を強く持った文学作品を残している。

物語は，オランダ植民地下のインドネシアで，オランダ流の教育を受けたミナンカバウの青年ハナフィと，フランス人を父に持つ娘コリーが，その出自故にインドネシア人社会からも，オランダ植民者社会からも疎外され，その愛を破綻させるという悲恋物語をメインストーリーに，その周辺に巧みに配置された様々の人々が社会の様々の部分を象徴して現われる。植民者社会と被植民者社会，西欧文化とインドネシアの伝統文化，西洋と東洋といった対立が互いに許容を許さない社会の中で，対立の狭間に生き，身をもって対立を具現化して破滅していく人間の物語である。ここでは，人と人を結びつける最後の絆，愛も引き裂かれていく。



本書は，50年以上も昔の植民地下インドネシアの物語であるにもかかわらず，少しも古さや異和感を感じさせずに迫ってくるものがある。それは，ひとつには，著者の老練な目が，若い男女の微妙な心理や，若者が周囲を顧みず，自分の気持ちだけを正しいと信じて暴走し挫折するという古今東西不変のテーマを巧妙に描いていることにもよるだろう。しかしむしろ，異なる民族・異なる文化・異なる価値観と，そこから生じる感情的対立がいかに根深いものであるか，またそれを乗り越えようとする人間の営みはどれ程困難であるか，という現代に通じる“近代人の苦悩”を先駆的に描き出している点にあるのではないだろうか。

それにしても，人物の描き方は厳しく冷徹である。この時代のインドネシア文学の特徴なのだろうか，インドネシア文学一般の特徴なのだろうか。　（牧田記）

助成刊行物紹介②（「隣人をよく知ろう」プログラム）

「わが祖国」

キン・スウエ・ウー著，田辺寿夫訳
井村文化事業社刊（ビルマ叢書文学編1）A5 262頁，1,500円

本書は，「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成を受けた東南アジアの著作の中で，はじめてのビルマの文学書である。

本書は，第2次世界大戦前後のビルマ独立をめぐるビルマ現代史上最も劇的な時代を描いた歴史小説であると言えよう。主人公の3人の男女とその周辺の人々以外は，すべて独立の英雄達が実名で登場し，物語の展開も史実に忠実に繰りひろげられる。その意味では，ビルマ独立小史として読むこともできよう。

英領下のビルマから物語は始まる。ビルマ独立の「三十人志士」の日本への密航，海南島での軍事訓練，BIA（ビルマ独立義勇軍）の結成，タイからビルマへの進攻，英植民地軍との戦闘，日本軍政下のビルマ，日本軍に対する戦いへの転回，連合軍の反攻とあわせて敗走する日本軍との戦闘，終戦，英国に対する独立の獲得，やがて起った，ビルマ国軍と，ビルマ共産党・カレン族・中国国民党残存軍との内戦と，ビルマの動乱の時代が描かれる。このような時代の流れを縦糸に，民族主義青年として戦いの先頭に立つコウ・トゥヤ，コウ・ヤンナウンの兄弟と，二人がともに思いを寄せる少女ミイとのラブ・ストーリーを横糸に，この時代を激しく生きた青年達の青春が描かれていく。

本書から何を読みとれるだろうか。ナショナリズムという言葉の中味であるビルマの人々の心の内なる思いを肌で感じることもできよう。また，その行間から，ビルマの人々の日本に対する複雑な感情，また旧宗主国英国に対する感情も読みとれるかも知れない。また，それを鏡として私たち自身について思いをめぐらせることもあるかも知れない。そんな時，訳者の解説は大変参考になる。本書は，日本人の読者を想定して書かれたものでないだけに，ビルマの人々の本音を垣間見ることができる。考えさせられる一冊である。（牧田記）

原著作表紙

最近の研究報告書から

当財団の助成成果の印刷については研究者からの申請によって印刷費用を助成する「成果発表助成」の仕組みがあります。これによりまとまった報告書のうち最近出たものを下記にご紹介します。ご希望の方はハガキにて財団レポート係にお申出下さい。無料でお送りします。但し申込多数の場合は先着順となりますのでご了承ください。

Ⅰ－008　環境化学物質による生体障害とその発生機構
（中井健五他，B－5　150頁　和文）
秋田大学医学部の若手研究者が従来の講座の枠を離れて横断的な研究を行ったもので重金属と農薬についての生体障害とその発生機構を動物実験により明らかにしようとしたものである。

Ⅱ－008　チーム・ケアと地域保健活動－日英比較研究として－（朝倉新太郎他，B－5　110頁　和文）
阪大医学部公衆衛生学教室と八尾市の医師会が中心となって同市における地域保健活動の実態を調査し，イギリスのケント市の実状と比較したもので先回紹介した「Ⅱ－006 英国の第一線総合保健サービスにおける医師，保健婦，看護婦の相互協力援助体制の実情に関する調査研究報告書」の続編に当る。

Ⅱ－009　精神薄弱者の社会的自立に関する基礎的研究
（菊池武剋他，B－5　76頁　和文）
京都教育大学の代表研究者と大阪府精神薄弱者更生相談所に勤務する心理技師との共同研究により，同相談所への来訪者を対象に表題のテーマについての調査を行ったものの初年度分の報告書である。

Ⅱ－010　保健福祉の町づくりに関する調査研究
（園田恭一他，B－5　265頁　和文）
東大医学部保健社会学教室と秋田県合川町とが共同で進めている「保健福祉の町づくり」プロジェクトの4年間の活動経過と各種調査をとりまとめた報告である。

Ⅲ－011　日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究（日本東欧関係研究会 B－5 438頁　和文）
神戸大学の木戸翁教授を代表とする日本東欧関係研究会は東欧諸国の日本研究者との共同により2年間の研究活動を行い昨年秋に「日本と東欧諸国の文化交流に関する国際シンポジウム」を開催した。この報告書はその時の提出論文と討論の内容をまとめたものである。

Ⅲ－013　女性と職業に関する予備的研究
（原ひろ子他，B－5　165頁　和文）
8名の女性研究者によって行われた中小企業における女性経営参加者についての事例研究のうち初年度に行われた予備研究の結果をまとめたものである。

Ⅵ－003　山形県朝日村変動の予備的研究
（結城清吾他，B－5　175頁　和文）
過疎山村である朝日村の役場の有志が地元の鶴岡高専教授である代表者の指導のもとに同村の社会変動の実態を独自の視点で整理し今後の過疎対策のあり方を探求しようとした研究の結果をまとめたものである。

第6回国際部門セミナーのご案内

トヨタ財団では，タイの著名な作家・評論家であり，現在タイの有力な総合文芸雑誌ブック・ワールド誌の編集長であるスチャート・サワッシー氏を招いて，第6回国際部門セミナーを下記の通り行います。一般公開となっておりますので，ご興味のおありの方は国際部門セミナー係までお問い合わせ下さい。

テーマ：「現代タイ文学の潮流－ビルマ文学，インドネシア文学，日本文学との比較において」
と　き：10月23日（土）〔京都〕，10月30日（土）〔東京〕

編集後記

▶「重金属の生体影響」シンポ，多数の報告者・討論者の皆様大変ありがとうございました。特に当初よりこの企画を推進して下さいました土井陸雄，最首悟，田口正の各先生方，ご苦労様でした。▶この報告会には専門の研究者以外に多数の聴衆が集まりました。研究は研究者のためのものという考えを少しでも脱し得ればと思います。▶財団の研究助成について代表申請者の所属機関を見ますと，大学・短大・高専・国公立研究所に所属する以外の人が占める割合がここ数年徐々に増加しております。（昭和54年－16%，55年－15%，56年－18%，57年－21%）▶この中には専門の研究者でないさまざまな人も含まれており，歓迎すべき傾向ではないかと思います。

トヨタ財団レポート　No.18
発行日　昭和57年7月27日
編集発行　財団法人　トヨタ財団
（担当　久須美雅昭）
印　刷　真友工芸株式会社
このレポートを継続してご希望の方はハガキにて財団レポート係までお申し込み下さい。無料です。